



## 「ともいき」のコンセプトを世界のスタンダードに

Kunio Iwatsuki

兵庫県立人と自然の博物館 岩槻邦男

名古屋で COP10 が開かれている間は、メディアにも生物多様性という言葉が取り上げられることが多かった。予想通りの成り行きではあるが、会合が終われば、水が退いたように、生物多様性という言葉はまた珍しい用語に戻ってしまった。そういう傾向に歯止めをかけるべく、国際生物多様性年から、生物多様性の 10 年の活動を世界に提起した日本人の 1 人として、生物多様性にこだわる論説を続けたい。

### 生物多様性の持続的利用への期待

生物多様性条約には 3 つの柱が設定されている。生物多様性の持続的利用、生物多様性のもたらす富の衡平な配分、そして生物多様性の保全、である。日本では、保全に重点をおいて語られることが多いが、COP10 が、生物多様性を何のために保全するかという基本から、生物多様性との「付き合い方」を考え直す機会になっていたか、今後の展開のためにも考えておく必要があるだろう。

持続的利用という言い方は、ブルントラント報告といわれる Our Common Future の頃から広く使われるようになった。最近では、sustainability という言葉が独り歩きして、sustainability science などという言い方もしばしば耳にするようになっていく。

生物多様性の持続的利用とは、現在わたしたちが享受している生物多様性からの恩恵を、孫子の世代も同じように受け取れるような状態に維持しつつ活用しよう、という考え方である。20 世紀には、資源の有効利用ということで、生物多様性についても早い者勝ちでとにかく目先の役に立てるという開発が、盲進といたいほどの進み方で環

境破壊を導いた。その結果が、21 世紀に持ち越した宿題が、環境問題と南北問題であると整理されるような状態を産み出した。

持続性を意図した開発、と言葉で表現したらそれこそ望ましいすがたである。しかし、それを実現させるにはどうしたらいいのか。20 世紀の後半、消費は美德であるというような標語を耳にした。右肩上がりの成長に支えられた繁栄と安全を維持するためには、活発な生産活動が不可欠とされたのである。しかし、この物質・エネルギー志向の西洋文明の考え方は、生物多様性の持続的利用と両立することができるのだろうか。

### 人と自然の共生を英訳する

1990 年大阪で開催された国際花とみどりの博覧会の際、サブテーマのひとつに使われた、人と自然の共生という標語は、その後急速に広がり、90 年代以後の日本の自然環境関係の文書には、その標語が入ってなければ時代遅れといわれそうな雰囲気さえ生じていたようだった。しかし、実際には、人と自然の共生は、歴史を通じて日本人が生きてきた生き方であり、明治維新と第二次世界大戦の敗戦という 2 度の精神革命によって西欧文明に傾倒してしまった現代日本人が捨て去ろうとしている考え方である。実体が生きている間は、それを形容する言葉は不要であるが、実体が失われると、それを表現する言葉が必要となる。同じことが、1960 年代のいわゆるエネルギー革命によって放棄が始まり、荒廃するようになった里山についてもいえる。人と自然の共生のシンボルのような日本固有の里山の景観は、上代にはすでに確立されていたという科学的考察もあるが、言葉とし

て日本人の間に普遍化するのには1960年代以後である。

さて、大阪花博の継承財団がコスモス国際賞を創設されたのは1993年である。準備が始まった頃、顕彰の目的のひとつである人と自然の共生への貢献という言い方を、英語で表現する必要に迫られた。数人のイギリスの仲間たちと討議して、やっと英語にしたのが、今も使われている Harmonious co-existence between nature and mankind である。もっとも、この英語表現、もう一度日本語に訳すと、人と自然の調和ある共存ということになり、元の日本語とは全くインパクトの異なる表現になってしまう。

むずかしいのは共生という言葉の英訳である。日本語の辞書では、共生・共棲の説明として、一般用語としては共に生きること、ともいき、などという説明があり、もうひとつは生物学用語である共生があげられる。生物学用語の共生は、symbiosis という言葉で表現されていた学術用語の和訳である。この語で示される現象は、生物の2種間の関係性で、双利共生、片利共生とよばれる現れ方をするが、さらに寄生と呼ばれる現象も含むのがふつうの定義である。

人と自然の共生という標語が環境関係の文書などによく使われるようになってから、文書の表題が英語化されることも増え、共生という語を簡単な和英辞書で見れば、生物学用語と断つての場合が多いが、symbiosis だけがあげられている。だから、Symbiosis between nature and mankind という表現をしばしば見ることになる。わたしは、うまくいいましたね、人は自然に寄生していますからね、と、全く違った意味に解釈させてもらって皮肉を言わせていただいたこともある。

もっとも、生物学者のうちにも、学術用語を自在に自分の解釈で広義に拡大して使う人も結構多いので、symbiosis にも共存の意味まで含めている場合が少なくない。（『生物学事典』では、たんなる共存は共生とはいわない、と釘がさされてはいるが。）

## 共生のこころ

英語で表現はしてみるが、このこころ、一生懸命に説明してみても日本人以外にはなかなか理解してもらえない。その意味を探ってみると、自然の観方がずいぶん違っていることに気づく。nature という英語を日本語では自然と訳すが、この2つの言葉を完全に同じものと理解するから面倒な行き違いが生じる。nature は wild と同義で、demon の住むところとされる。グリムの童話に出てくる魔法使いのおばあさんは、邪悪で、森に住んでいて、人間社会では暮らせない存在である。だから、nature を人が育てた文明の力で開発し、nature の資源を有効利用することは善なる行為なのである。

日本人は弥生時代の昔から森を八百万の神の住処と見なしてき、農耕のために森の一部を伐開して農地をつくったとき、開発された人里に奥山の依り代としての森を確保して、八百万の神の鎮守を期待した。やがて、そこに屋代→社が造られると、森は鎮守の杜として大切にされてきた。日本列島の全土に奥山と人里が峻別され、補助的に資源を獲得した里山が、その間に緩衝地帯を形成するようになった。野生の住む奥山と人の生活場所である人里がきれいにゾーニングされ、野生と人の共生のかたちが設定された。明治維新の頃まで、大型中型の哺乳類のどの種も絶滅させなかった日本列島の人と自然の共生が上手に演出されてきたのである。

日本人の自然観の底には、恵まれた豊かな生物多様性への感謝の気持ちと、頻発する自然災害への畏怖の念がない交ぜになっていると、寺田寅彦も早くから指摘しているところである。だから、将来された浄土思想を鎌倉時代に日本風に発展させてから、宗教理念としても「ともいき」のこころを重んじるようになる。

## 勿体ないといえますか

豊かな自然の恵みは、八百万の神からの授かり物としての勿体を高貴なものを見なす日本人の自然観を育てた。明治初年生まれわたしの祖母は、わたしが子どもの頃、食事の時にご飯粒をこぼし

でもしようものなら、勿体ない、勿体ない、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、と唱えながら拾うように教えてくれたものである。勿体ない、を字引で引くと、いくつかの説明のうちに、まだ使えるのを無駄にするのは勿体ない、という解釈が付け加えられる。しかし、本来の意味は、神からの授かり物を軽んじるのは勿体ない、のである。

江戸時代の後期、江戸は人口百万の都市に育っていた。その頃、パリもロンドンも百万都市だったそうである。ところが、江戸はパリやロンドンに比べてはるかに清潔な街だったというのが定説である。日本人の着物は、汚れると洗い張りという日本固有の手法で洗浄され、再生された。何度も縫い直されると、縫い目がダメになるので、身頃を狭くして子どもの着物に仕立て直した。それも出来なくなると、パッチ状の布を縫い合わせて布団の表に使ったし、その役にも立たなくなると、雑巾にした。雑巾にも使えないほどぼろぼろになると、乾かして燃料とし、灰は肥料に用いた。高貴な勿体はありがたく利用させていただくもので、どこまでいっても廃棄物などにはならなかった。ものを大切にすることは今でも伝統を重んじる庶民の間には広く伝わっている。同じ考えで、排泄物も小舟に積んで運河をさかのぼって関東地方で広く肥料に使われ、豊かな農産物が江戸の人々の食卓を豊かにした。見事なりサイクルが成立していたのである。これを、江戸時代の庶民は貧しかったから、糞尿さえ金にした、と説明されているのを読んだことがあるが、もしそうなら金には目敏いパリやロンドンの住人も糞尿を売りに出したのだろうが、勿体の高貴さに対する観念が違うのだから、西の国では汚いものを厭う気持ちがわずかな代価には見合わなかったのだろう。それをパリやロンドンの庶民の方が豊かだったと説明するのだろうか。本当に、彼らはそれほど豊かだったのだろうか。

まだ大学にいた頃、ちょうど高度経済成長に沸き立っていた頃だったが、わたしはその頃は手書きにしていた原稿の下書きを、たくさんもらっていた会議資料などの裏を利用して書いていた。あ

る時、大学院生の1人が、新しい紙をどんどん使わないと、経済成長のためになりませんよ、と白紙をもってきてくれたことがあった。研究費が乏しかった頃にケチでやっていただけではなくて、新しい紙と同じように有用な働きをする紙を、無駄に焼却場へ向けるというのはわたしには考えられないことだったのである。しかし、消費が美德とされたある時期、わたしのとっていた行動は時代に反抗するケチといわれたものだった。

### 持続性を維持する共生の生き方

自然の産物を人間のための資源と見なし、経済的な効率に合わせて豊かに安全に利用しようとするれば、人が自然に圧迫を加えないと右肩上がりは期待できない。孫子の時代まで、わたしたちと同じように生物多様性の恩恵を享受しようとするれば、それに合わせた利用法を生きることが最低の要求である。「ともいき」という言い方をしたとき、人の生は自然に生きている多様な生き物の生と共通すると喝破していた。生物多様性は人のためにあるものではなくて、生物多様性と共生して生きてこそ、人の生の永続性は期待できる。わたしたちは自分の生を自分という個体の生で考え、ヒトという種の生で考える。しかし、わたしも、人類も、単独で生を完結できる存在ではない。今、わたしのからだを構成する60兆の細胞が、自然条件下では個々の細胞の状態では生きていけないように、わたしも人類も、生物多様性を構成するすべての生き物たちと一体となっはじめて地球上の生命系の生を生きているという事実を認識したい。

生物多様性の持続的利用は地球規模の課題である。環境問題に対しては、いつでも、act locally, think globally と唱えられる。すべての人が実践活動と取り組むことが不可欠であるが、それには地球規模での考察がともなっている必要がある。「ともいき」という日本人の思想が地球規模で展開されることこそが、地球の持続性を維持する基盤であると考えるところである。